

V 水稲の病害虫防除

—— 発病・加害時期
 == 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平坦部移植 (中生：ヒノヒカリ)					●	▲	—	○		■		
中山間部移植 (極早生：キヌヒカリ)				●	▲	—	○		■			
いもち病					—	—	—	—	—			
稲こужい病								—	—			
ごま葉枯病								—	—			
小白粒菌核病								—	—			
白葉枯病								—	—			
内穎褐変病								—	—			
もみ枯細菌病					—			—	—			
紋枯細菌病								—	—			
萎縮病								—	—			
縞葉枯病								—	—			
斑点米カメムシ類								—	—			
イネカメムシ								—	—			
イネクロカメムシ								—	—			
セジロウンカ								—	—			
トビイロウンカ								—	—			
ヒメトビウンカ								—	—			
ツマグロヨコバイ								—	—			
コブノメイガ								—	—			
ニカメイチュウ(ニカメイガ)								—	—			
イネツトムシ(イチモンジセセリ)								—	—			
フタオビコヤガ(イネアオムシ)								—	—			
イネミズゾウムシ								—	—			
イネドロオイムシ								—	—			
イナゴ類								—	—			
スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)								—	—			

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

水稲の種子消毒

1 種子消毒浸漬薬剤の使用法

農薬名	RACコード	希釈倍数	浸漬時間	ばか苗病	いもち病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	苗立枯細菌病	褐条病	セネシチュウガレ	苗立枯病			
											トリコデルマ	リゾープス	ピシウム	フザリウム
テクリードC フロアブル	3M1	(高濃度)20倍	10分	○	○	○	○	○	○		○	○		
		200倍	24時間	○	○	○	○	○	○		○	○		
ベンレート水和剤 注(3)	1	(高濃度)30倍	10分							○				
		(高濃度)30~50倍	10分	○	○									
		100~500倍	24時間								○			
		500~1000倍	6~24時間	○										
		500~1000倍	12~24時間		○									
エコホープDJ 注(4)	BM2	200倍	浸種前~ 催芽前: 24~48時間	○	○		○	○	○			○		
			催芽時: 24時間	○	○		○	○	○				○	
スミチオン乳剤	1B	1000倍	は種前: 6~72時間							○				
パダンSG水溶剤 劇	14	1500~ 3000倍	浸種前: 24時間							○				

(注)

- (1) ばか苗病等の発生の多いところでは、高濃度短時間浸漬の方法で処理する。
- (2) 浸種薬液の温度は10℃以下や30℃以上を避ける。
- (3) ベンレート水和剤は、浸漬処理後風乾すること。
- (4) エコホープDJは生物農薬で耐性菌出現のリスクが低いですが、ベンレート水和剤等、併用できない薬剤があるので注意する(効果)。また処理後は風乾せず、直ちに浸種あるいは催芽させる。
- (5) スミチオン乳剤、パダンSG水溶剤は、いずれかをイネシンガレセンチュウ消毒剤として、同虫に登録の無い殺菌剤の浸漬処理時に混和して使用する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 種子消毒・水稲は種の手順

塩水選

(水10L当たり)

水 洗 い

◎塩水選における比重と食塩または硫酸の量目安

種 類	比 重	食 塩	硫 酸
う る ち	1.08 (1.13)	1.1kg (2.0kg)	1.4kg (2.5kg)
も ち	1.06 (1.08)	0.8kg (1.1kg)	1.0kg (1.4kg)

袋 詰 め

※()内は、より強く選別をする場合の目安

- ・サラシ等の網袋に5分目程度入れる。
- ・容量に余裕をもたせて縛る。

種子消毒

化学農薬による消毒
(種子消毒浸漬薬剤の
使用方法) 参照

温湯消毒 (60℃、10分間)
・処理中の温度を一定に保つように
湯量に注意する。
・処理後は直ちに流水中で冷却する。
・温度ムラが出ないように、時々網を
揺する。

生物農薬による防除
(種子消毒浸漬薬剤の
使用方法) 参照

- ・農薬消毒後は水洗いはしない。

風 乾

12~24時間陰干しする。

- ・風乾により種子に薬剤をしっかり
付着させると効果が高まる。
- ・風乾する必要のない薬剤もある。
(テクリードCフロアブルなど)

浸種と催芽

- ・浸種は、必ず停滞水中で
行う。流水では薬効が落
ちる恐れがある。水が汚
れた場合は静かに水を入
れ替える。

水 温	浸種時間
15℃	5~6日間
20℃	4~5日間

は 種

- ・芽が1mm程度になれば日陰で
風乾してからは種する。
芽が伸びすぎると、は種時に
折れてしまう可能性があるので
注意する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

主な水稲箱施用剤適用病害虫一覧表（主な使用法のみ抜粋）

- 1 下記以外の使用方法もあるので詳しくは各剤のHP等を参照すること。
- 2 薬剤によっては、適用のない病害虫もあるので下表を参照する。
- 3 SDHI剤(RACコード7等)は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 4 他作物に影響を及ぼす場合があるので、薬剤が育苗箱からこぼれ落ちないように注意する。

農薬名	成分数	RACコード		育苗箱1箱当たり使用量(g/箱)	使用時期	適用病害						適用害虫												
		殺虫IRAC	殺菌FRAC			いもち病	紋枯病	白葉枯病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	穂枯れ(こま葉枯病菌)	ウンカ類	ツマングロヨコバイ	(ニカカメイチガウ)	コブノメイガ	(イチネモンジトセリ)	イネミズゾウムシ	イネドロオウムシ	イナゴ類	(フタオビオムシ)				
																					適用あり	適用あり	適用あり	適用あり
リディアNT箱粒剤	1	4F		50	は種前(床土混和)																			
					は種時(覆土前)～移植当日																			
					移植3日前～移植当日																			
ブーンアレス箱粒剤	2	37	P8	50	は種前(床土または覆土混和)	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
					は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
スタウトアレス箱粒剤 稲名人箱粒剤	2	37	P3	50	は種前(床土または覆土混和)	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
					は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ビームプリンス粒剤	2	2B	16.1	50	移植3日前～移植当日	○																		
フェルテラゼクサロン箱粒剤	2	28 4E		50	は種時(覆土前)～移植当日																	○		
					移植3日前～移植当日																			
サンスパイク箱粒剤	3	28 4E	16.3	50	移植3日前～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤	3	28 4E	P3	50	緑化期～移植当日	○		○	○													○		
					移植3日前～移植当日																			
サンフェスタ箱粒剤	3	28 4A	16.3	50	移植3日前～移植当日	○		○	○	○											○			
防入箱粒剤	3	28 4E	P3	50	は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
稲大将箱粒剤	3	37	P3 7	50	は種時(覆土前)～移植当日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
ビームパラタス箱粒剤	3	5 4E		50	移植3日前～移植当日	○																		
					移植当日																			
フルスロットル箱粒剤	4	28 4E	P3 7	50	は種時(覆土前)～移植当日	○	○	○	○													○		
					移植当日																			

適用病害虫について：○…適用あり

※使用量は30×60×3cmの育苗箱で床土+覆土約5L、10aあたり20箱移植を前提としている。

高密度には種して10aあたりの苗箱数を少なくする場合は別途メーカーの指示に従うこと。

リディアNTは同成分のリディアに比べて使用時期幅が広い。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

いもち病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、育苗期から成熟期まで発生する。発病部位によって、育苗中～後期の苗いもち、本田の葉いもちと出穂後の穂いもち(穂首いもち、枝梗いもち、みごいもち、靱いもち)、節いもちなどがある。
- 2 病原菌の分生子が被害わら・もみがら・種もみ等で越冬し、翌年、種子伝染や空気伝染した後、分生子から菌糸が発芽して植物体内に侵入し発病する。
- 3 気温25～28℃、多湿で日照不足の時に多発し、降雨、チッソ過多、過繁茂などの場合に発病が助長される。
- 4 薬剤は基本的に発病予防効果だが、ブラシン剤は発病後の治療効果もある。

防除方法

- 1 種子は塩水選を行い、必ず種子消毒をする。((種子消毒の項)参照)
- 2 厚まきを避け、健苗の育成に努める。
- 3 罹病苗を本田に移植しない。
- 4 密植は、発病を助長することがあるので避ける。
- 5 補植用の置き苗は発生源となりやすいので長く本田に放置しない。
- 6 チッソ質肥料の過用を避け、追肥は遅れないようにする。
- 7 低水温、日照不足はイネの本病に対する抵抗性を低下させるので山間部では冷水かんがいにならないようにする。
- 8 常発地では深耕に努め、堆きゅう肥による土作りやケイ酸質肥料(ケイカルなど)の増施を行う。
- 9 耐病性品種を用いる。
- 10 山間地等のいもち病発生の多いところでは、いもち病に登録のある防除薬剤を箱施用する。(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 11 本田において、葉いもち及び穂いもちの発生が見込まれる場合には、下記の薬剤を施用する。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) < P 2 >
【3～4kg/10a 散布 葉いもち：初発10日前～初発時、穂いもち：出穂3～4週間前(収穫14日前)/2回】
 - ・ [コラトップ粒剤5](#) < 1 6. 1 >
【3～4kg/10a 散布 葉いもち：初発10日前～初発時、穂いもち：出穂30～5日前/2回】
 - ・ [ゴウケツ粒剤](#)、[サンブラス粒剤](#) < 1 6. 3 >
【3～4kg/10a たん水散布 出穂5日前(収穫30日前)/1回】
 - ・ [ゴウケツパック](#)、[サンブラスパック](#) < 1 6. 3 >
【(10個)450g/10a 投げ込み散布 出穂5日前(収穫30日前)/1回】

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [フジワン粒剤](#) <6>
【3～5kg/10a たん水散布 葉いもち：初発7～10日前、
穂いもち：出穂10～30日前（収穫30日前）/2回】
- 12 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [ブラシンフロアブル](#) <U14><16.1> 【1000倍 7日/2回】
- ・ [ブラシン粉剤DL](#) <U14><16.1> 【3～4kg/10a 7日/2回】

苗立枯病

留意事項

- 1 糸状菌による苗病害の総称。
- 2 主に別表の6種の病原菌がある。
- 3 箱育苗で発病が多い。
- 4 予防には種子消毒を徹底すること。
- 5 粉剤を床土混和する場合は、まず砂土等で薬剤を増量してから床土に混合するとムラになりにくく混ぜやすい。
- 6 前年使用した育苗箱を用いる場合は、きれいに洗浄後、イチバン500～1000倍液に瞬時浸漬、またはケミクロンG1000倍液に10分間浸漬または、500倍液に瞬間浸漬もしくはジョウロ散布して消毒してから使う。（XIV 農業用資材の消毒法 参照）

(別表) 苗立枯病病原菌の種類と薬剤の効果の関係

(○は効果有)

	白絹病菌	トリコデルマ菌	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	リゾクトニア菌
ダコニール					○	
タチガレエースM			○	○		
バリダシン	○					○
ベンレート		○		○		

防除方法

- 1 土壤水分の管理に注意し、過湿、過乾を避ける。
- 2 温度の激変は本病発生の原因となるので、苗を高温、低温にあわせないようにする。
- 3 は種前に下記の薬剤を育苗箱（30×60×3cm 使用土壌約5L）の床土に均一に混和する。
- ・ [タチガレエースM粉剤](#) <32><4>
【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 6～8g/箱 は種前/1回】
- 4 は種時または発芽後に下記の薬剤を育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）に土壌かん注する。
- ・ [タチガレエースM液剤](#) <32><4>
【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 500～1000倍 500ml/箱 は種時または発芽後/1回】 または

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌）1000倍 1L/箱 は種時/1回】
- ・ [ダコニール1000](#) <M5>
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 500～1000倍 500ml/箱 は種時～緑化期（は種14日後まで）/2回】または
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 1000～2000倍 1L/箱 は種時～緑化期（は種14日後まで）/2回】
 - ・ [ダコニールアルファ](#) <M5>
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 2000倍 500ml/箱 は種時～緑化期（ただし、移植15日前まで）/2回】または
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 4000倍 1L/箱 は種時～緑化期（ただし、移植15日前まで）/2回】
- 5 育苗中に発生を認めたら速やかに下記のいずれかの薬剤を育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）にかん注もしくは土壌かん注する。
- ・ [ベンレート水和剤](#) <1>
 - 【苗立枯病（フザリウム菌） 500～1000倍 500ml/箱 は種時/2回】または
 - 【苗立枯病（トリコデルマ菌） 500～1000倍 500ml/箱 または 1000倍 1L/箱 は種時/1回 または は種時とは種7日後頃/2回】
 - ・ [タチガレエースM液剤](#) <32><4>
 - 【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 500～1000倍 500ml/箱 は種時または発芽後/1回】または
 - 【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 1000倍 1L/箱 は種時/1回】
 - ・ [バリダシン液剤5](#) <U18>
 - 【苗立枯病（リゾクトニア菌、白絹病菌） 1000倍 500ml/箱 は種時～発病初期/1回】

稲こうじ病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、出穂前後に降雨があれば発生しやすい。
- 2 前年に穂にできた厚膜胞子等が田面や畦畔に落ちて越冬し、翌年の伝染源になる。
- 3 多発すると不稔籾が多くなり、収量低下を起こす。また、羅病籾や菌塊が籾や玄米に混入すると検査で規格外になるなど、品質低下の原因になる。

防除方法

- 1 種子は無病ほ場のものを使用する。
 - 2 チッソ肥料の過用を避ける。
 - 3 下記の薬剤を散布する。
- ・ [ブラシンフロアブル](#) <U14><16.1> 【1000倍 7日/2回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [モンガリット粒剤](#) <3> 【3~4kg/10a たん水散布 30日/2回】
- ・ [フジワン粒剤](#) <6>
【3~4kg/10a たん水散布 出穂10~30日前（収穫30日前）/2回】

ごま葉枯病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で病原菌の菌糸が稲わらやもみで越冬し、翌年、空気伝染や種子伝染する。
- 2 苗の段階から発病し、秋には穂に発生し、穂枯れを起こす。
- 3 やや砂質土の珪酸分の不足するいわゆる「秋落田」に発生しやすい。
- 4 ごま葉枯病が多発生すると穂枯れを起こしやすくなるので、多発ほ場では出穂期～傾穂期に薬剤を散布する。
- 5 SDHI剤<<11>>は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 チッソ、カリ、鉄、マンガン、ケイ素などの欠乏は発病を助長するので、ケイ酸質肥料（ケイカルなど）を施用し、土壤の改良を図る。
- 2 硫酸根肥料（硫安など）の連用を避け、チッソ質肥料の分施をする。
- 3 生わらは、早期にすき込むか堆肥として施用し、未熟な有機質資材の施用を避ける。
- 4 被害わらを本田周辺に放置しない。
- 5 根腐れを起こさないよう、かん排水など水管理に注意する。
- 6 種子消毒を行う。（（種子消毒の項）参照）
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ブラシンフロアブル](#) <U14> <16.1> 【1000倍 7日/2回】
 - ・ [オリブライト250G](#) <<11>>
【穂枯れ（ごま葉枯病菌）250g/10a 出穂10日前（収穫45日前）/1回】

小粒菌核病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、本病には小黒菌核病と小球菌核病があり、後者は湿田に多く発生する。
- 2 被害刈株やわら、土壌上の菌核が伝染源になり、代かき時に浮き上がりイネに感染する。
- 3 高温多湿時に被害が多い。
- 4 株元に薬剤を十分散布する。

防除方法

- 1 前年の被害わらは施用しない。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 分けつ最盛期は浅水とし、排水を良好にして根腐れを防ぐ。
- 3 カリ肥料を十分施し、チッソ肥料の過用を避ける。
- 4 下記の薬剤を散布する。
 - ・ [フジワン粒剤](#) <6>
【4～5kg/10a たん水散布 出穂10～30日前（収穫30日前）/2回】

白葉枯病

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で被害わらや河川や畦畔沿いのサヤヌカグサ等の多年生雑草の根部で越冬し、それが翌年の第1次伝染源となる。
- 2 台風の豪雨などで田が浸水、冠水すると多発する。
- 3 病原菌は葉の気孔や傷口から侵入する。常発地では浸冠水や台風直後に薬剤を散布する。
- 4 り病葉を水に入れると、数分で切り口から白い糸状液(菌泥)が噴出することで判定できる。

防除方法

- 1 浸水、深水を避ける。
- 2 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 冬期に畦畔や水路の雑草を処分する。
- 4 露のある時は、なるべく発生田に入らないようにする。
- 5 常発地では、いもち病との同時防除をかねて粒剤の予防散布を行う。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) <P2>
【3～4kg/10a 移植活着後及び出穂3～4週間前（収穫14日前）/2回】

内穎褐変病（ないえいかっぺんびょう）

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で、出穂前後に高温で降雨があると発生しやすい。
- 2 もみの内穎が特異的に褐変し、外穎が褐変することは少ないので他病と見分けやすい。
- 3 前年発生したほ場では発生しやすい。
- 4 薬剤は出穂前後2回散布するほうが効果が高い。昨年発生が見られたほ場では穂ばらみ期（出穂5日前～出穂日）に必ず薬剤を散布する。

防除方法

- 1 チッソ肥料の過用を避ける。
- 2 種子は必ず塩水選を行う。
- 3 発生したほ場では、稲わらや不稔もみを堆肥化してから利用する。
- 4 箱施用殺虫殺菌混合剤にも本病に適用のあるものがある。水稲箱施用剤適用病害虫

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

一覧表のページを参照のこと。

- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ブラシフロアブル](#) <U 1 4>< 1 6. 1> 【1000倍 7日/2回】
 - ・ [ゴウケツパック](#)、[サンブラスパック](#) < 1 6. 3>
 - 【(10個)450g/10a 投げ込み散布 出穂5日前（収穫30日前）/1回】
 - ・ [ゴウケツ粒剤](#)、[サンブラス粒剤](#) < 1 6. 3>
 - 【3~4kg/10a たん水散布 出穂5日前（収穫30日前）/1回】

もみ枯細菌病

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で、育苗期の苗腐敗症と出穂期以降の穂枯れを起こす。
- 2 育苗時期、特に出芽時の温度が高い場合に発病しやすいので、30℃以下になるように、温度管理に注意する。
- 3 出穂期に高温で降雨日数が多いと発病しやすい。穂に白色の萎凋したもみが混在し、後に灰白色～淡黄褐色となって、稔実不良となる。
- 4 前年多発したほ場では適用農薬を予防散布する。

防除方法

- 1 種子は、無病ほ場のものを選ぶ。
- 2 種子は塩水選を行い、必ず種子消毒をする。（(種子消毒の項)参照）
- 3 幼苗腐敗症（イネもみ枯細菌病菌）の防除には、育苗箱（30×60×3cm 使用土壌約5L）の覆土前に、は種した種もみの上から下記の薬剤を均一に散布する。
 - ・ [カスミン液剤](#) < 2 4>
 - 【幼苗腐敗症（イネもみ枯細菌病菌）4~8倍 50ml/箱 覆土前/1回】
 箱施用殺虫殺菌混合剤にもは種時の使用で幼苗腐敗症に適用のあるものがあるので水稲箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照のこと。
- 4 発病ほ場の稲わらやもみからは水田に直接還元せず、堆肥化するなどし、病原菌密度を減らしてから利用する。
- 5 深水や冠水状態になると発病が多くなるので、生育初期は浅水管理とする。
- 6 出穂前に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) < P 2>
 - 【3~4kg/10a 移植活着後及び出穂3~4週間前（収穫14日前）/2回】
 - ・ [コラトップ粒剤5](#) < 1 6. 1> 【4kg/10a 出穂30~5日前/2回】
- 7 出穂直前～穂揃期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ブラシフロアブル](#) <U 1 4>< 1 6. 1> 【1000倍 7日/2回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

紋枯病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、高温（28～32℃）多湿時に多発する。
- 2 チッソ過多、密植、分けつ過多で発病が助長される。
- 3 キヌヒカリは本病にやや弱い。
- 4 前年の被害株や畦畔などの罹病雑草に形成された白色～淡褐色の直径2mm程度の菌核が越冬し、翌年の第1次伝染源となる。
- 5 SDHI剤<<7>>は耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用を避け、なるべく浅水管理する。
- 2 畦畔、水路などの雑草を刈り取る。
- 3 代かき後の浮遊物には、紋枯病の菌核が多いため除去する。
- 4 被害わらは、完熟堆肥にして施用する。
- 5 過繁茂にならないようにする。
- 6 下記の薬剤を穂ばらみ期から出穂期にかけて散布する。
 - ・ [リンパー粒剤](#) <<7>> 【3～4kg/10a 30日/2回】
- 7 下記の薬剤を出穂4～2週間前に施用する。
 - ・ [モンカット粒剤](#) <<7>>
【3～4kg/10a たん水散布 出穂30～10日前（収穫14日前）/4回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [バリダシン液剤5](#) <U18> 【1000倍 14日/5回】
 - ・ [モンガリット粒剤](#) <3> 【3～4kg/10a たん水散布 30日/2回】

萎縮病

留意事項

- 1 本病はおもにツマグロヨコバイによって媒介されるウイルス病。また、一部はイナズマヨコバイによっても媒介される。

防除方法

- 1 ウイルス病で本病に対する登録農薬はない。
- 2 常発地ではできるだけ早植えを避け、また田植時期を揃えるようにする。
- 3 本田初期の感染を防止するため、媒介虫であるツマグロヨコバイの防除薬剤を育苗箱施用する。防除については、ツマグロヨコバイの項を参照。

縞葉枯病（しまはがれびょう）

留意事項

- 1 ヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病である。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 近年、増加傾向にある。
- 3 本田初期に発生すると、新葉が細くなり巻いて垂れ下がって枯れ、「ゆうれい症状」と呼ばれる状態になる。本田後期の感染では、黄緑色の条斑を生じ、出穂が異常となって出すくみ症状を起こす。
- 4 抵抗性品種では発病が抑えられるが、本府の現在の主力品種ヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリはいずれも本病への抵抗性が無いので注意する。

防除方法

- 1 ウイルス病のため、本病に対する登録農薬はない。媒介虫ヒメトビウンカを防除。
- 2 常発地では、早植えを避けるとともに田植時期を揃える。
- 3 密植を避けて通風を良好にするとともにチッソ質肥料の過用を避ける。
- 4 本田初期の感染を防止するため、ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 5 6月下旬～7月上旬の感染が多いので、この時期のヒメトビウンカの防除を徹底する。
- 6 防除については、ヒメトビウンカの項を参照する。
- 7 収穫後は発病した株のひこばえを介して、越冬するヒメトビウンカ幼虫の保毒虫率が高まる可能性があるため、早めに刈り株をすき込み、ひこばえを処分する。

斑点米カメムシ類

留意事項

- 1 近年、本府ではアカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメなど小型の斑点米カメムシ類の被害が多い。
- 2 イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。
- 3 薬剤散布は穂揃期（出穂すべき穂のうち7割から8割が出穂している時期）に行う。
発生が多い時は乳熟初期（出穂後10日頃）にも散布する。
(水稲は出穂始（走り穂）から2～4日程度で出穂期を迎え、出穂期から2～4日程度で穂揃期となる。走り穂が見えてから約1週間で出穂を完了する。)
- 4 アカヒゲホソミドリカスミカメは別名イネホソミドリカスミカメとも呼ばれる。
- 5 本府では現時点では顕著な被害は出ていないが、近年、関東から西日本の複数の都府県から斑点米カメムシの一種であるイネカメムシによる基部斑点米又は不稔米被害が報告されており、府北部でも発生が確認されている。イネカメムシは水田飛び込み時期が他のカメムシより少し早く、開花直後から穂の吸汁加害を始めるので他の斑点米カメムシより早めの出穂期の防除が必要。予察情報等に注意して発生が見込まれるときは防除時期を逸しないように注意する。

防除方法

- 1 ほ場周辺の畦畔や休耕田の雑草を刈り取る。ただし、出穂前後の除草は逆にカメムシ類を水田に追い込むことになるため、この時期は実施しないこと。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 畦畔にグランドカバープランツを植栽する等イネ科雑草を減らすようにする。
- 3 下記の薬剤を出穂期(イネカメムシ)～穂揃期(その他斑点米カメムシ)に根元まで届くように散布する。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布。
粒剤使用の場合、イネカメムシは出穂期、その他斑点米カメムシの防除最適期は出穂期～7日目頃。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A >
【カメムシ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【カメムシ類 2000倍 14日/3回】
 - ・ [スミチオン乳剤](#) < 1 B > 【カメムシ類 1000倍 21日/2回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) < 4 A >
【カメムシ類 2000倍 7日/3回】
 - ・ [スタークル豆つぶ](#) < 4 A > 【カメムシ類 250g/10a 7日/3回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) < 4 A > 【カメムシ類 3～4kg/10a 7日/3回】

イネクロカメムシ

留意事項

- 1 斑点米カメムシ類とは異なり、越冬成虫は6～7月に水田に侵入し、イネの株元に生息し葉鞘から吸汁加害する。生育初～中期に加害されると葉先がよじれ、草丈が低く分けつ不良となり減収する。

防除方法

- 1 下記の薬剤を発生初期(6月下旬～7月上旬)に散布する。
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【カメムシ類 2000倍 14日/3回】
 - ・ [スミチオン乳剤](#) < 1 B > 【カメムシ類 1000倍 21日/2回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A > 【カメムシ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) < 4 A > 【カメムシ類 3～4kg/10a 7日/3回】

セジロウンカ(夏ウンカ)、トビイロウンカ(秋ウンカ)

留意事項

- 1 セジロウンカ、トビイロウンカとも国内では越冬できず、毎年、常発しているベトナム北部から中国大陸経由で日本に飛来する。
6月下旬～7月中旬の梅雨時期に下層ジェット気流に乗って飛来することが多い。
- 2 発生予察情報に注意し、早期発見・早期防除に努める。
- 3 セジロウンカの多発時には7月中旬～8月上旬に1～2回本田防除が必要である。セジロウンカは8月下旬以降は水田から移出することが多く被害は少なくなる。
- 4 トビイロウンカの多発時には8月上旬～9月中旬に1～2回本田防除が必要である。
- 5 農薬散布は株元まで十分に薬剤が行き渡るように行う。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 6 投げ込み剤は、藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意。
- 7 近年、従来の薬剤に対する薬剤抵抗性個体群が飛来して問題になっている。

防除方法

- 1 過繁茂はウンカ類の増殖を助長するので、密植を避け、通風を良好にするとともにチッソ質肥料を過用しないこと。
- 2 ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)
- 3 7月以降本田で発生が見られたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) <4 C> 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) <4 C> 【ウンカ類 2000倍 7日/3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) <4 F> 【ウンカ類 1000倍 7日/2回】
 - ・ [オーケストラ粉剤DL](#) <-> 【ウンカ類幼虫 3~4kg/10a 7日/3回】
 - ・ [オーケストラフロアブル](#) <-> 【ウンカ類幼虫 1000倍 7日/3回】、
高濃度少量散布【ウンカ類幼虫 200倍 25L/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A> 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル豆つぶ](#) <4 A> 【ウンカ類 250~500g/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル粉剤DL](#)、[アルバリン粉剤DL](#) <4 A> 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) <4 A>
【ウンカ類 3000倍 7日/3回】
 - ・ [トレボン粒剤](#) <3 A> 【ウンカ類 2~3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [パダントレボン粒剤](#) 劇 <3 A><1 4> 【ウンカ類 3kg/10a 30日/3回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) <3 A> 【ウンカ類 3~4kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) <3 A> 【ウンカ類 1000~2000倍 14日/3回】
 - ・ [アプロードパダン粒剤](#) 劇 <1 4><1 6>
【ウンカ類幼虫 3~4kg/10a たん水散布 30日/4回】

ヒメトビウンカ

留意事項

- 1 吸汁による直接害よりも、縞葉枯病の媒介による被害の方が大きい。
- 2 縞葉枯病は6月下旬~7月上旬の感染が多いので、この時期のヒメトビウンカの防除を徹底する。
- 3 国内で越冬もするが中国大陸からも飛来してくる。
- 4 主に4齢幼虫が雑草中で越冬し、春先にイネ科雑草や麦畑で越冬世代成虫となり繁殖し、その子である第1世代成虫が苗代や田植直後の水田へ飛来し加害する。
- 5 年間4~5世代程度発生を繰り返し、秋にひこばえでも繁殖するため収穫後できるだけ

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

け早く耕うんし、ひこばえを無くす。

防除方法

- 1 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、越冬密度を下げる。
- 2 密植を避け、通風を良好にするとともに、チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 4 発生が多い場合は下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アブロード水和剤](#) <16> 【ウンカ類幼虫 1000～2000倍 7日/4回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4A> 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン粒剤](#) <3A> 【ウンカ類 2～3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) <4C> 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) <4C> 【ウンカ類 2000倍 7日/3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) <4F> 【ウンカ類 1000倍 7日/2回】

ツマグロヨコバイ

留意事項

- 1 成虫、幼虫がイネを直接吸汁加害するだけでなく萎縮病ウイルスを媒介する。
- 2 多発時には、7月中下旬または8月中下旬に1～2回防除を行う。
- 3 農薬散布時は株元まで十分に薬剤がゆきわたるように行う。
- 4 多発地帯では共同防除など広域防除が効果的である。
- 5 投げ込み剤は、藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意。

防除方法

- 1 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、越冬密度を下げる。
- 2 密植を避け、通風を良好にするとともにチッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 4 発生が多い場合は下記の薬剤を施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) <3A> 【2～3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) <3A> 【1000～2000倍 14日/3回】
 - ・ [なげこみトレボン](#) <3A>
【水溶性容器入り10個(500ml)/10a 5葉期以降(21日)/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4A> 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) <4C> 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) <4C> 【2000倍 7日/3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) <4F> 【1000倍 7日/2回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

コブノメイガ

留意事項

- 1 府内では越冬できずセジロウンカ、トビイロウンカと同様、下層ジェット気流に乗って毎年梅雨期に中国大陸から飛来する。年による発生量の変動が大きい。
- 2 幼虫が1枚の葉を縦に綴って中に潜み、夜間に薄皮一枚を残してかすり状に食害する。食害痕は白くなり目立つ。
- 3 発蛾最盛期
飛来世代成虫：6月下旬～7月中旬
第1世代成虫：7月下旬～8月中旬
第2世代成虫：8月下旬～9月中旬
- 4 被害が多いのは第2世代幼虫期の8月上旬～中旬及び第3世代幼虫期の9月上旬～中旬。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用で葉色が濃い水田は周囲に比べて成虫が集中して産卵し、被害が大きくなるので注意する。また、一枚の水田の中でも葉色の濃い部分に被害が集中する。
- 2 飛来世代が産む第1世代幼虫を防除するために本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)
- 3 発生が多い場合は発蛾最盛期に下記の薬剤を散布する。老齢幼虫には薬剤の効果が薄いので、若齢幼虫期を狙って散布遅れのないようにする。止葉の被害率が2～3割以上になると減収する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) < 1 4 > 【3～4kg/10a 30日/6回】
 - ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) < 1 4 > 【1500倍 21日/6回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) < 3 A > 【3～4kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【1000倍 14日/3回】

ニカメイチュウ（ニカメイガ）

留意事項

- 1 近年は発生量が減っているが、重要害虫である。幼虫がイネの茎内に食入して穂枯れを起こす。枯れた白穂を引っ張ると簡単に抜け、下部に食害があれば本虫の食害を疑う。
- 2 発蛾最盛期
越冬世代成虫：5月下旬～6月上旬
第1世代成虫：7月下旬～8月中旬
第2世代幼虫はイネ茎内でそのまま越冬し翌年越冬世代成虫として羽化する。
- 3 中山間地帯など田植えの特に早い地域では、発蛾最盛期が早くなるので防除時期を

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

早める。

- 4 有機リン剤抵抗性が一部地域で発生しているので注意する。

防除方法

- 1 早植えを避ける。
- 2 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 第2世代幼虫がおもに被害わら内で越冬するので、多発年には翌年のために冬期に耕起したり、わらの処分をする。
- 4 越冬世代成虫が産む第1世代幼虫の防除のために本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。

(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)

- 5 発生が多い場合には、越冬世代発蛾最盛期からその後10日～14日後と第1世代発蛾最盛期から7日後頃に下記のいずれかの薬剤を散布する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) < 1 4 > 【3～4kg/10a 30日/6回】
 - ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) < 1 4 > 【1500倍 21日/6回】
 - ・ [トレボン粒剤](#) < 3 A > 【第1世代 3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A > 【3kg/10a 7日/3回】

イネツトムシ (イチモンジセセリ)

留意事項

- 1 ふ化した幼虫は葉を筒状に丸めて中に潜み、夜間に食害する。成長すると葉を数枚綴り合わせて苞(つと)を作り、中に隠れている。
- 2 年3～4回発生し、暖冬の年に発生が多い。
- 3 若齢期防除に努める。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 2 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)
- 3 発生が見られたら下記の薬剤を幼虫発生期(7月下旬～8月上旬)に散布する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) < 1 4 > 【3～4kg/10a 30日/6回】
 - ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) < 1 4 > 【1500倍 21日/6回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) < 3 A > 【4kg/10a 7日/3回】

フタオビコヤガ (イネアオムシ)

留意事項

- 1 密植、過繁茂でチッソの効いた高湿度の水田に多発する。
- 2 幼虫は緑色のイモムシでイネの葉を初期にはかすり状に食害し、大きくなると不規

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

則に食害し、イネの見た目がボロボロになる。

- 3 終齢幼虫はイネの葉を2~3折りに折りたたんで苞を作り、中で蛹になる。
- 4 苞は切り離され水面に浮かび流れて行くこともあり、蛹で越冬する。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)
- 2 発生が多い場合には下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) < 3 A > 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル粉剤DL](#)、[アルバリン粉剤DL](#) < 4 A > 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) < 1 4 > 【3~4kg/10a 30日/6回】

イネミズゾウムシ

留意事項

- 1 アメリカからの侵入害虫。成虫で越冬し、春に入水すると水田に侵入してくる。
- 2 成虫は葉を白い筋状に食害する。幼虫は土中で根を食害し被害が大きい。
- 3 成虫は移動範囲が広いので、地域で一斉防除を行うことが必要。
- 4 パック剤や投げ込み剤は藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意。

防除方法

- 1 越冬世代成虫の侵入が集中しないように周囲の水田より極端な早植えを避ける。
- 2 幼虫の根の食害で特に株張りが悪い場合は、予備苗による補植を行うほか、浅水管理し、再発根を促す。
- 3 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病虫害一覧表のページを参照)
- 4 越冬世代成虫の発生が多い場合には6月上~中旬に下記のいずれかの薬剤を本田施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) < 3 A > 【2~3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [なげこみトレボン](#) < 3 A >
【水溶性容器4~6個(200~300ml)/10a 5葉期以降(21日)/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A > 【3kg/10a 7日/3回】

イネドロオウムシ

留意事項

- 1 自分の糞を背中に背負った幼虫(その姿からドロオウムシと呼ばれる)がイネの葉上で白い筋状に食害する。イネミズゾウムシの食痕より太い。
- 2 成虫も同様にイネの葉を食害する。正式名はイネクビボソハムシ。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 山間の涼しい地域の水田で発生する。イネミズゾウムシと異なり、幼虫は地中ではなく葉上にいるので根は食害しない。成虫で越冬する。
- 4 パック剤や投げ込み剤は藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 2 越冬世代成虫の発生が多い場合には6月上～7月中旬に次のいずれかの薬剤を施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) < 3 A > 【2～3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [なげこみトレボン](#) < 3 A >
【水溶性容器4～6個(200～300ml)/10a 5葉期以降(21日)/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A > 【3kg/10a 7日/3回】

イナゴ類

留意事項

- 1 幼虫は畦畔等のイネ科雑草を食害した後、本田に移動して水稲を加害する。そのため若齢幼虫期に畦畔への散布や本田の額縁散布を行うと効果が高い。
- 2 畦畔等の雑草を刈り取る。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページを参照)
- 2 発生が多い場合には下記の薬剤を施用する。
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【1000～2000倍 14日/3回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) < 3 A > 【3～4kg/10a 7日/3回】

イネシンガレセンチュウ

留意事項

- 1 0.5～0.7mmほどの線虫がイネに寄生して発症する。葉の先端部の3～5cmがこより状に白く枯れる。ほ場全面に発生すると「ホタルイモチ」とも呼ばれる。
- 2 被害籾は登熟不良となり、しいなが多くなる。多発ほ場では10～30%減収することもある。
- 3 特徴的な症状として、玄米の一部がくさび状に黒変する黒点米を生じ、検査等級格下げの原因になる。
- 4 被害もみ・もみがらが翌年の伝染源となる。採種ほ産の種子を使うようにする。
- 5 イネのほか、あわ、エノコログサなどにも発生する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 6 薬液法による種子消毒の際にスミチオン乳剤やパダンSG水溶剤を混用する場合、高濃度短時間処理には対応していないので低濃度長時間浸漬とすること。

防除方法

- 1 種子消毒を下記のいずれかの方法で行う。
 - (1) 温湯浸漬法
乾燥もみを60℃の温湯に10分間浸した後、直ちに冷水で冷やす。
 - (2) 薬液法
種子を薬液に浸漬する。種子消毒のページを参照。
- 2 出穂期から開花期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スミチオン乳剤](#) <1 B> 【1000倍 21日/2回】

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

留意事項

- 1 田植直後（約20日間まで）の小さな苗のみを食害する。
- 2 スクミノンはたん水状態（3～5cm）で均一に散布。散布後7日間はたん水状態にし、落水やかけ流しをしない。また、水田以外に使用しない。
- 3 冬期に水田や水路に水をためない。
- 4 石灰窒素は高濃度のチッソ肥料でもあるので、代かき前に施用する場合は元肥量の加減をする。

防除方法

- 1 水田や水路の貝を拾い取るとともに、卵塊を水中に落とす。卵は水中ではふ化できないため、卵塊を水中に払い落とすことで駆除が可能。ただし、ふ化直前の黒～白っぽくなった卵塊は水中でもふ化可能であるため、水中に落とすとが逆効果になるため、除去又は押しつぶすことが必要。
また、用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網（網目9mm以下）を設置する。
- 2 行動を抑制するため水深4cm以下の浅水管理を行う。
- 3 植代前耕起後にたん水して3～4日後に石灰窒素を散布、3～4日放置後代かきを行う。（漏水を防止すること。）
 - ・ [粒状石灰窒素40](#) <—> 【20～30kg/10a 植代前/1回】
- 4 食害防止を目的として、下記薬剤をは種前に育苗箱床土に均一に混和するか、又は移植当日に育苗箱中の苗の上から均一に散粒する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) <1 4> 【育苗箱1箱当り60～100g は種前または移植当日/1回】
- 5 田植直後に殺貝のため下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スクミノン](#) <—> 【1～4kg/10a 60日/2回】
 - ・ [スクミンベイト3](#) <—> 【2～8kg/10a 発生時/—】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

-
- ・ [ジャンボたにしくん](#) <—> 【1~2kg/10a 60日/2回】
- 6 食害防止を目的として水稲移植直後に下記の薬剤を散布する。
- ・ [パダン粒剤4劇](#) <14> 【4kg/10a 30日/6回】
- 7 刈取後3~4cmにたん水し、1~4日後に石灰窒素を散布、3~4日放置する。(漏水を防止すること。)
- ・ [粒状石灰窒素40](#) <—> 【20~30kg/10a 刈取後(水温15℃以上の時期)/1回】
- 8 越冬個体は約8割が地表から深さ6cm以内に分布。稲刈り後にロータリーによる水田耕起(耕うんを浅く、ロータリー回転を速くする)を行い、土中に潜った貝を粉碎し貝の密度を下げる。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

主な登録農薬一覧（本田施用剤）

1 殺菌剤

農薬名	適用病害								使用基準
	いもち病	紋枯病	白葉枯病	もみ枯細菌病	ごま葉枯病	内穎褐変病	稲こうじ病	小粒菌核病	
オリゼメート粒剤 <P2>	○		○※	○※	穂				葉いもち:初発10日前～初発時/2回 他:出穂3～4週間前(収穫14日前)/2回
オリブライト250G <<11>>	○	○	○		穂		○		出穂10日前(収穫45日前)/1回
コラトップ粒剤 <16.1>	○			○					葉いもち:初発10日前～初発時/2回 他:出穂30～5日前/2回
ゴウケツ粒剤 、 サンプラス粒剤 <16.3>	○		○	○		○			出穂5日前(収穫30日前)/1回
ゴウケツパック 、 サンプラスパック <16.3>	○		○	○		○			出穂5日前(収穫30日前)/1回
バリダシン液剤 <U18>		○		○					14日/5回
フジワン粒剤 <6>	○						○	○	葉いもち:初発7～10日前/2回 他:出穂10～30日前(収穫30日前)/2回
ブラシフロアブル <U14><16.1>	○			○	○穂	○	○		7日/2回
モンカット粒剤 <<7>>		○							出穂30～10日前(収穫14日前)/4回
モンガリット粒剤 <3>		○			穂		○		30日/2回
リンバー粒剤 <<7>>		○							30日/2回

(1) 適用病害について

○：登録あり 穂：穂枯れ（ごま葉枯病菌）に登録あり ※：移植活着後も使用可

(2) 使用基準の使用回数は、本田にて使用できる回数

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 殺虫剤

農薬名	RACコード	適用害虫											使用基準					
		ウンカ類	ツマグロヨコバイ	(ニカメイチュウ)	コブノメイガ	イチモンジセセリ	(イネツトムシ)	フタオビコヤガ	(イネアオムシ)	カメムシ類	イナゴ類	イネミズゾウムシ		イネドロオウムシ	イネゾウムシ	イネセンチュウ	スクミリンゴガイ	(ジャンボタニシ)
アプロード水和剤	<16>	幼	幼															7日/4回
ジャンボたにしくん	<->																○	60日/2回
スタークル粉剤 DL アルバリン粉剤 DL		○	○	○				○	○	○			○					7日/3回
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	<4A>	○	○	○					○				○	○				7日/3回
スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤		○	○						○									7日/3回
スクミノン	<->																○	60日/2回
スクミンベイト3	<->																○	発生時/ー
スミチオン乳剤	<1B>	ヒ		1,2		○	○	○					○			○		21日/2回
ダントツ粒剤	<4A>	○	○	○					○									7日/3回
トレボン粉剤 DL		○	○	○	○	○	○	○	○	成	○							7日/3回
トレボン乳剤		○	○		○				○	○	○	○						14日/3回
トレボン粒剤	<3A>	○	○	1						○	○	○	○					21日/3回
なげこみトレボン		○	○	1						○	○	○						5葉期以降(21日)/3回
パダン粒剤4 劇				○	○	○	○										食	30日/6回
パダンSG水溶剤 劇	<14>			○	○	○												21日/6回
粒状石灰窒素 40	<->																○	刈取後(水温15℃以上の時期)/1回 または 植代前/1回
アプロードパダン粒剤 劇	<14> <16>	幼		○	○	○												30日/4回
パダントレボン粒剤L 劇	<3A> <14>	○	○	○	○								○	○				30日/3回

(1)適用について：○…成・幼虫ともに登録あり 幼…幼虫に登録あり 成…成虫に登録あり 食…食害防止
ヒ…ヒメトビウンカに登録あり 1…ニカメイチュウ第1世代に登録あり 2…ニカメイチュウ第2世代に登録あり

(2)使用基準の使用回数は、本田にて使用できる回数

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 混合剤（殺菌・殺虫剤）

農薬名	RAC コード	適用病虫害													使用基準				
		いもち病	紋枯病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	ごま葉枯病	稲こうじ病	ウンカ類	ツマゲロヨコバイ	（ニカメイチュウ）	（ニカメイガイ）	コブノメイガ	（イネモンジセセリ）	（イネアオムシ）		（フタオビコヤガ）	カメムシ類	イナゴ類	イネミズゾウムシ
ワイドパンチ豆つぶ	I:2B F:《11》	○	○			穂	○	○							○				35日/1回
ダブルカットバリダトレボン粉剤3DL	I:3A F:24、16.1、U18	○	○	○	○			○	○			○			○				穂揃期/2回
ゴウケツモンスター粒剤	I:4A F:3、16.3	○	○	○		穂	○	○	○					○	○				出穂5日（収穫45日）/1回
イモチエースタークル粒剤	I:4A F:《11》	○	○			穂		○	○					○	○				35日/1回
フジワンラップ粒剤	I:2B F:6	○					○	○		○					○				30日/2回

(1) 適用病害について：○…登録あり 穂…ごま葉枯病菌による穂枯れに登録あり

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

4 ドローン対応剤（殺菌・殺虫・殺虫殺菌剤）

ドローンは積載重量が少なく、薬剤タンクの容量が小さいため、液体の農薬については、高濃度・少量での散布が可能な”ドローンに適した農薬”の登録が求められている。

”ドローンに適した農薬”は、「使用方法」が、『無人航空機による散布』、『無人ヘリコプターによる散布』、『無人航空機による滴下』または『無人ヘリコプターによる滴下』とされている農薬である。

なお、使用方法において、散布機器が指定されていない『散布』、『全面土壌散布』などとなっている農薬（粒剤などの固体の農薬を含む）についても、その使用方法を始め、希釈倍率、使用量等を遵守できる範囲であれば、ドローンで使用可能である。

農薬名	RAC コード	希釈倍数 使用量	い も ち 病	も み 枯 細 菌 病	内 穎 褐 変 病	ご ま 葉 枯 病	稲 こ う じ 病	ウ ン カ 類	ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	コ ブ ノ メ イ ガ	フ タ オ ビ コ ヤ ガ	カ メ ム シ 類	イ ナ ゴ 類	イ ネ ド ロ オ イ ム シ	使用基準
オリゼメー ト粒剤 40	F:P02	500g/10a	○												14日/2回
コラトップ 粒剤 24	F:16.1	500g/10a	○												注①
ゴウケツ 粒剤 500	F:16.3	500g/10a	○	○	○										注②
サンプラス 粒剤 18	F:16.3	500g/10a	○	○	○										注②
ビームゾ ル 劇	F:16.1	6～8倍	○												7日/3回
フジワン 乳剤	F:6	8倍	○				○								14日/2回
ブラシンフ ロアブル	F:U14、 F:16.1	8倍	○	○	○	穂	○								7日/2回
アプロード ゾル	I:16	16倍						幼	幼						7日/4回
エクシード フロアブル	I:4C	16倍						○	○			○			7日/3回
エミリアフ ロアブル	I:4F	8倍						○	○	○		○		○	7日/2回
オーケスト ラフロアブル	I:UN*	16倍、 8倍						幼	幼						7日/3回
スタークル 液剤 10	I:4A	8倍、16 倍、30倍						○	○			○			7日/3回
トレボンエ アー	I:3(A)	8倍						○	○	○	○	○	○		14日/3回
ハンプラス ダントツフ ロアブル	I:4A、 F:16.1、 F:U14	8倍	○					○				○			7日/2回

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

－水稲－

農薬名	RAC コード	希釈倍数 使用量	い も ち 病	も み 枯 細 菌 病	内 穎 褐 変 病	ご ま 葉 枯 病	稲 こ う じ 病	ウ ン カ 類	ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	コ ブ ノ メ イ ガ	フ タ オ ビ コ ヤ ガ	カ メ ム シ 類	イ ナ ゴ 類	イ ネ ド ロ オ イ ム シ	使用基準
ビームエ イトEXゾ ル	I:4C、 F:16.1	8倍	○					○				○			7日/3回
ビームエ イトエクシ ードゾル	I:4C、 F:16.1	8倍	○					○				○			7日/3回
ビームエ イトスター クルゾル	I:4A、 F:16.1	8倍	○					○	○			○			7日/3回
ブラシダ ントツフロ アブル	I:4A、 F:U14、 F:16.1	8倍	○					○				○			7日/2回
ブレードス タークルR ゾル	I:4A、 F:U14、 F:16.1	8倍	○					○				○			7日/2回
ラブサイド スタークル フロアブル	I:4A、 F:16.1	4倍	○					○				○			7日/3回
ラブサイド ダントツフ ロアブル	I:4A、 F:16.1	8倍	○					○				○			7日/3回

注①：葉いもちに対しては初発10日前～初発時 穂いもちに対しては出穂30日前～5日/2回

注②：出穂5日前まで 但し、収穫30日/1回

穂：ごま葉枯病菌による穂枯れ

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかき流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。